

# 母子相互作用と育児に関する社会学的並疫学的検討

○植田理彦(財団法人  
日本健康開発財団)  
力石道勝(〃)

昭和56, 57年度は、「母子相互作用と育児に関する社会学的並びに疫学的検討」の主題のもとに、家庭婦人と職業婦人の母性意識についてのアンケート調査及びグループインタビュー調査を行い、また当財団総合健診センターに於ける受診データ、婦人科的検診データにより、家庭婦人と職業婦人の両者について比較検討を行った。

昭和58年度は、「海外居住邦人主婦の育児に関する研究」として海外居住邦人の主婦が、異国の環境で育児に就いて、いかなる変化がみられたかを、アンケート調査で行い、併せて母親の健康状態の変化を、出国前と帰国後について、健診データから比較検討した。

「母子相互作用に関する研究」テーマに対し、3年間にわたってアンケート調査、グループインタビュー調査を実施し、母子相互作用の環境的、心理的な側面の把握をすると共に、他方では血液生化学的検査を主とした母親の健診データ、あるいは婦人科的検診データにより、疫学的検討も行った。

調査方法は一貫して同じ手法を用いた。

以下、社会学的研究と疫学的研究の二つに別けて報告する。

## 1. 社会学的研究

アンケート調査、グループインタビュー調査から以下のことがら得られた。

1) 家庭婦人と職業婦人を比較すると、一般には家庭婦人の方が母性意識が強いと思われるが結果は逆で、職業婦人の方が、母親としての意識が強い。

家庭婦人、職業婦人の母性意識の分布をみると、育児で充実感がよくあるのは、職業婦人に多い。家庭婦人は、よくあると時々あるに分散している。子供をもって自分も成長できたのも職業婦人に多い。子供は自分の一部のような感じを持っているのも、職業婦人にやや多い。自分の関心時間を子供にとられてしまうというのは、家庭婦人に多い。

育児ノイローゼになる心境に共感できるのは、職業婦人に時々あり、家庭婦人にたまにあるが多い。

2) 生き甲斐とか人生をどう生きるかということについては、職業婦人の方が明確に自己の主張を持っている。

一番大切なもの、生きがいとなっているものは、両者とも子供であり(92~93%)、夫である(78~79%)。

次いで職業婦人は、職業(52%)経済的基盤をつくること(33%)趣味(30%)社会活動(18%)家事(15%)であり、家庭婦人は趣味(43%)家事(11%)社会活動(8%)経済的基盤をつくること(6%)職業(1%)となっている。

3) 夫の育児態度については、家庭婦人の方に不満を持ったり、こうして欲しいという欲求が強い。

4) 家庭婦人、職業婦人の両家庭とも、子供に対しては、「健康でのびのび育てて欲しい」という願いが最も多い。

5) 海外駐在者については、異国であるために、夫婦間の子供の育て方に対する意見交換が活発である。日本にいるときより夫と育児についての話し合いが多くなっている。

6) 育児方針の変化については、海外生活で「やや変わった」が53.6%「全く変わった」が1.8%みられた。全く変わった中には、より日本的に子供を育てようとした人と、その国の習慣に合せ切ってしまうおとした人である。

7) 海外生活上の心配事については、子供の病氣、健康に関してが最も多く、次いで子供が病氣をした場合、果してしっかりした診断と治療をしてもらえるだろうかという不安である。

8) 海外駐在中、子供の健康に注意して何らかの形で定期的に健康診断を受けさせている。

9) 子供の教育に関しては、日本人学校に就学させている家庭が多く、現地の学校に入学させている家庭でも、日本語の補習校に入れている。特に発展途上国に駐在している家庭にそれが多い。

10) 出産に就いては、出国前に出産を済ませる主婦が多いが、現地で出産経験者もいるが、先進国に多い。

## 2. 疫学的検討

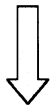
職業婦人、家庭婦人グループとも「肩こり」が最も多いが、職業婦人では、子供を持つグループより子供を持たないグループに多くの自覚症状を訴え、心因性胃腸症状が特に多い。

総合健診の結果分析によると、職業婦人、家庭

婦人、及び主婦の海外渡航前と帰国後の身体状況に変化なく、また血液生化学的諸検査結果も有意の差はみられない。

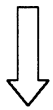
個人のインテリゲンス、性格などによりストレスをうまくかわせるか否かによって病的主訴は増減するものである。

今後の研究としては、われわれが行ってきたアンケート調査の実数をふやし、定量分析を進めるとともに、心理学的側面の調査を深めるための深層心理分析を行う必要があると思われる。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昭和 56, 57 年度は、「母子相互作用と育児に関する社会的並びに疫学的検討」の主題のもとに、家庭婦人と職業婦人の母性意識についてのアンケート調査及びグループインタビュー調査を行い、また当財団総合健診センターに於ける受診データ、婦人科的検診データにより、家庭婦人と職業婦人の両者について比較検討を行った。

昭和 58 年度は、「海外居住邦人主婦の育児に関する研究」として海外居住邦人の主婦が、異国の環境で育児に就いて、いかなる変化がみられたかを、アンケート調査で行い、併せて母親の健康状態の変化を、出国前と帰国後について、健診データから比較検討した。

「母子相互作用に関する研究」テーマに対し、3 年間にわたってアンケート調査、グループインタビュー調査を実施し、母子相互作用の環境的、心理的な側面の把握をすると共に、他方では血液生化学的検査を主とした母親の健診データ、あるいは婦人科的検討データにより、疫学的検討も行った。